

## ニーチェは現代の脳研究を見たのか—運動準備電位と自由意志—

松波 烈 (Retsu Matsunami)

京都大学

2人のイタリア人によるグロイター社出版批判全集に収録されている遺稿は、中期～最晩年のニーチェ思想を理解する上での必須の資料となっている。それら断片群には、存命中の既刊書の註となる文章もあれば、公刊著作にはまず見られない考察も記している。例えば、難解なものとされる「超人」は単に生物分類のつもりで提唱したものだったと述懐する W II 2. Herbst 1887, 10[17]なり、社会的感情が個人のそれを上回っている事実を現代の進化心理学が用いる前提を用いて説明している <M III 1. Frühjahr-Herbst 1881, 11[130]>なり、生物学的ないし科学的な内容をした文章が少なくない。中には、当時大流行していた交霊術を科学の見地から説明しようとしている <N V 9a. N VI 1a. Tautenburger Aufzeichnungen für Lou von Salomé. Juli-August 1882, 1[31]> などという断片もあり、そこでは、術式参加者らの「無意識」の思考内容が霊媒の人物へと電流を通じて伝わってゆく様子を、運動時に「脳」と効果器の間に生じる電流とアナログ的に描きつつ、19世紀後半に知られるようになる「幻肢」(phantom limb)、さらには、21世紀近くになって現れる「ゴムの手の錯覚」(rubber hand illusion) という知見と酷似した知見を披露している。

科学の批判者として知られるニーチェが遺稿群の中で見せる顔は、おうおうにして、科学の知見に存分に浸り、科学の知識を素直に楽しみながら、日常的なさまざまな身の事柄の観察に生き生きとした興味を示す人物である。今見たように、20世紀後半の科学研究に達する水準すら示しながら、人間を単なる一生物として捉え、ときにその特徴を生態学的に考察し、ときのその活動を、無意識的過程や脳や電流といった知見を駆使しながら説明しようとしていた。

こういったニーチェの遺稿断片には、それこそ断片的でありほとんど何を述べているか判然としづらく見過ごされている文章がいくつもあがあるが、その多くが、明白に科学的であり、現代の研究領域から見ればその内容が明確になると考えられる。本研究で取り上げるものは、1970年代頃からの B・リベットらの実験研究から見ればその内容が明確になるであろう断片である。その謎めいた断片 <Mp XVII 1b. Winter 1883-1884, 24[34]> で述べていることは、体運動に際して意志が発動する前に運動のための過程が脳内で終了しているということである。つまり、腕を上げよう意志した時には腕はすでに上がり出しているとして述べているのである。理解不可能な、または到底受け入れがたい考えであり、普通なら見過ごされるか、理解不能ながらと言及されるような内容であろう。ところが、ここで述べていることが完全な事実であることが、20世紀後半の脳研究によって証明されてしまうのである。リベットらは、指を動かす被験者が指を動かそうと意志したタイミングと指の運動のための準備電位発生とにタイムラグがあることを発見し、前者が後者に先立っていることを発見した。この発見は認知科学をこえて哲

学等をも巻きこむ論争となっている。自由意志が何もしていないことが証明されてしまったのである。そしてニーチェが、被験者も実験器具も何も用いずに、この事実を述べてしまっていたのである。

『善悪の彼岸』第19節などをはじめとして、ニーチェが自由意志を否定した言葉を残していることはつとに知られており、議論が蓄積されている。しかしその際には、この人が具体的に何を思い描きながら否定作業をしていたのかが、果たして理解されているだろうか。この人の本心は明らかになっているのだろうか。それを遺稿群の中に探し訪ねる研究が、始まるのかもしれない。